

## ヨーロッパにおける街路樹管理の特徴

西野精二

The Features of Roadside Tree Care in Europe

Seiji NISHINO

### 要 約

街路樹の管理手法は、ヨーロッパでは各国それぞれに特徴がある。イギリスでは、樹幹に腐朽が入りにくい剪定方法が実践されている。フランスでは、1本1本の樹を見ずに全体の集合体として管理している。ロンドン、ハンブルク等の植樹帯を十分にとった電信柱のない道路では、見事な街路樹の景観を作り出している。一方、電話線など公共設備が地中に埋設されているため、周辺整備や再開発等で、街路樹の地際部のすぐ横を掘り返す場面が各都市で多く見られた。

Key words : roadside tree, prune, europe, tree doctor

### 1. はじめに

奈良県職員研修所(現 自治能力開発センター)の平成13年度海外派遣研修により、2001年10月10日から11月9日まで、イギリス、ベルギー、ドイツ、フランスの街路樹の管理実態を剪定方法を中心について調査したので、その概要を報告する。

### 2. 各国の街路樹管理の実態

#### (1) イギリス

ロンドン市内やロンドンから遠く離れたコッツェルズ地方で、樹木本位の管理が以前から実践されていることが観察された。

まず、枝の切る位置と角度についてであるが、切り口の癒合を促進する適切な剪定方法<sup>1) 2)</sup>(第1図)が以前から実践されていることが認められた。コッツェルズ地方のシュードリー城内のカシワの木の手切り方は見事で、大きな切り口にもかかわらず癒合がきれいに完成していた。

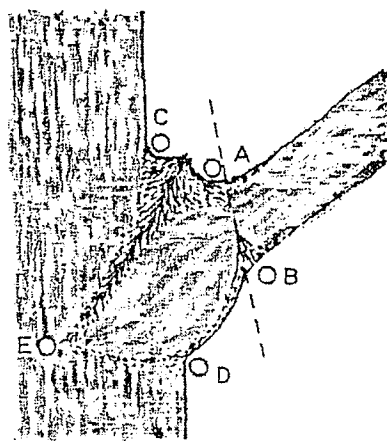
地下部についても、根の生育場所である土壌の管理に十分配慮がされており、ロンドンのセントジェームズパーク北側のバッキンガム宮殿に続くプラタナスの並木道では、人が歩く部分のみ舗装されており、街路樹が植栽されている部分は未舗装のままであった(第2図)。

街路樹の剪定方法の基本は、垂れ下がって通行に邪魔になる枝、内部の枯れ枝、建物に接触する

枝ははずすのが中心で、全体を透かすことはせず、イングリッシュガーデン流の自然重視型であった。

#### (2) ベルギー

国を代表する観光都市ブルージュでの樹木の管理実態はお粗末で、木の腐朽を考慮しない枝の剪定方法(第3図)や根を覆ってしまうアスファルト舗装などが、いたる所で見られた。首都ブラッ



第1図 剪定位置によるカルスの形成状況

街路樹剪定士必携(社団法人 日本造園建設業協会)より



第2図 歩道のみ舗装されている (ロンドン)



第5図 見事なシナノキの街路樹、中央部は歩行禁止 (ハンブルク)



第3図 樹形と腐朽を考えずに剪定している (ブルージュ)



第6図 側面を刈揃えている (パリ)



第4図 主幹を切り戻した樹形 (ブラッセル)



第7図 街路樹のすぐ横を掘り起こしている (マルセイユ)

セル郊外の住居地域の街路樹では、樹高1.5メートル前後で幹が一旦ブツと切られ、その切り口から多数の徒長枝を発生させて樹冠を形成している木が多く見られた(第4図)。樹木の生態に立脚した管理意識は低く、本来の樹姿へのこだわりも無い。

### (3) ドイツ

カールスルーエの生物工学研究所での樹木力学に関する研究は極めて著名である<sup>3)</sup>。しかしながら、管理実態は地域によって様々で地方の独自性が強く出ていた。北部の中心都市ハンブルクでは、道路の中央部の分離帯を広く設けて木を植栽し、見事なTilia(シナノキ科)の街路樹を完成させていた(第5図)。また、東部の古都ドレスデンは東ドイツ時代の面影が残り、すべてが広くゆったりと配置され、街路樹の植栽領域も広くとられていた。市内では、クレーンの先のボックスに乗り、プラタナスの不要枝を落とす透かし剪定が行われていた。

しかしながら、西部の観光都市ハイデルベルクでは、枝の切り方は理論通りには実践されておらず、腐朽が進み大きな空洞を樹幹下部に持っているものも多く見られた。

### (4) フランス

宮廷園芸のシンメトリックに刈り込まれた整然とした美しさは特徴的であるが、街路樹管理も例外ではない。パリの凱旋門から続くシャンゼリゼ通りのプラタナス並木も、きれいに角形に刈り揃えられており(第6図)、枝の切り方を樹一本単位で考えず、街路樹としての外枠の形だけが重視されていた。従って樹の幹の太さ(樹齢)も様々で、不都合があれば順次植え替えられている。

南部地域では、アヴィニヨンのプラタナスの街路樹が立派であるが、太い中心の幹を切って縮伐し、大きな空洞ができていたものがたくさん確認された。また、マルセイユの駅前のプラタナスの並木は、枯れ枝が多く、大木のすぐそばで地面を掘り起こす工事がされていた(第7図)。

全域的に個々の樹木の幹や根の腐朽を未然に防止するという管理意識は低い。

## 3. 欧州の樹木管理研究への取り組み

### (1) イギリス樹木管理協会(Arbicultural

Association)

Arbicultural Association(以下A.A.)のTechnical Officerを務めるNick Eden氏に、コッツウォルズ地方のチェルトナムで、その活動状況についてお聞きした。チェルトナムは彼が樹木管理計画を立案し、実践している街である。訪問した時はちょうど文化祭週間(Cheltenham festival of Literature)にあたり、各地から講演会などへの参加者が多く集まり、緑豊かな街並みが活気にあふれていた。彼の勤務地はここを本拠とし、週に何度か約200km離れたロンドンの本部へ行っている。

A.A.は、イギリスで樹木を管理する人たち2000人を擁する技術レベルの高い団体で、会員の中から一定の基準を満たした者を認定して登録名簿を公表している。会費は、学生、一般個人、施工業者ごとに異なり(年間それぞれ50,100,150ポンド)、会報誌の発行や研修会を開いている。また、会員の活動に関して、協会として倫理規約を設けている。

### (2) ドイツ都市樹木管理研究所(Institut für Baumpflege)

ハンブルクにある民間の都市樹木管理コンサルタント会社である。研究所の代表であるDr. Dirk Dujessiefken氏に活動概要についてお聞きした。

研究所では都市樹木の維持管理に関する試験研究をしながら、管理に関するコンサルタント業務、セミナーの開催などを有料で行っている。現在の研究テーマは、樹幹が裂けるのを防ぐブレイシング(bracing)技術であるとのこと。

活動地域は、アメリカをはじめヨーロッパ各地など全世界に及んでいる。樹木の管理上、最も重要でかつ改善しやすいことは、枝の切り方であるという認識で、図解入りのわかりやすい啓発ポスターを作成していた。

## 4. 街路樹管理の問題点

### (1) 落ち葉処理

我が国で、街路樹維持管理上の問題点について全自治体にアンケートしたところ、落ち葉処理とする自治体が62.4%<sup>4)</sup>にのぼり、回答数の第1位となっている。しかしながら、自治体メインストリートの街路樹採用樹種第1位はケヤキで、上

第1表 我が国における自治体のメインストリートの街路樹採用樹種

順位	樹種名	(%)
1	ケヤキ	(31.9)
2	イチョウ	(17.0)
3	クスノキ	(14.8)
4	サクラ類	(10.9)
5	ハナミズキ	( 7.1)
6	トウカエデ	( 6.8)
7	プラタナス	( 5.5)
8	ユリノキ	( 5.1)
9	ヤマモモ	( 4.4)
10	ナンキンハゼ	( 4.2)

亀野辰三・八田準一著/1997/街路樹・みんなで作るまの顔(公職研)より

位10種では落葉樹8種、常緑樹2種<sup>4)</sup>(第1表)である。植栽本数(高木類)で見ても、愛知県では落葉樹が81.4%<sup>5)</sup>という報告もある。一方、奈良県ではこれとは逆に、常緑樹の方が57.9%(県道、委託国道の高木類)と落葉樹より多く植栽されている<sup>5)</sup>(第2表)ものの、残りの半数近くが落葉樹であることにはちがいない。

ヨーロッパでも同様の状況が予想され、事実ベルギーの都市近郊部では、プラタナスなどの大きな葉が落葉し道路に堆積すると車がスリップするので地方の主要道が通行止めになることもある。ヨーロッパでは、基本的に街の中の落ち葉処理は役所が行っており、ロンドン郊外の住宅地では、朝のゴミ収集時に大きなハケ状のほうきで落ち葉を道路端に集めていた。ドイツの観光都市ハイデルベルクやニュルンベルクでは、落ち葉を吸引して回収する車が街の中を定期的に周回し、東部のドレスデンでは、ゴミ収集車が落ち葉を専門に集めてまわっていた。また、日本でよく見かける落葉する前に枝ごと剪除する作業も、フランスのアヴィニヨンの住宅地内で見られた。

ヨーロッパの街路樹の樹種は、プラタナス、チューリップツリー、マロニエ、ライム類の落葉樹がほとんどで、落ち葉処理の問題は日欧共通のようである。

## (2) 電線等の地下埋設

ヨーロッパの観光都市が日本の市街地と違う点は、石畳が多いこと(特に路地裏)、せまい所に

第2表 奈良県の街路樹の植栽本数比率(県道、委託国道の高木類)

順位	樹種名	(%)
1	シラカシ	(17.6)
2	アラカシ	(12.8)
3	ケヤキ	(11.4)
4	イチョウ	(10.4)
5	サンゴジュ	( 8.7)
6	ハナミズキ	( 7.2)
7	ヒイラギモクセイ	( 6.9)
8	クスノキ	( 5.4)
9	トウカエデ	( 3.0)
10	サクラ類	( 2.9)

奈良県土木部/1998/街路樹の整枝剪定マニュアルより

無理に街路樹が植栽されていないこと、そして空に電線が無いことである。樹は空に向かって自由に伸びて行き、その木の本来の姿を表わしていた。

しかし、地面に目をやるとロンドン郊外での電話線の工事やマルセイユ駅前通りの電線工事のほか、ブラッセル市内の公園、ドレスデンの集合住宅地内など、周辺で住民の生活に変化があると、いたるところで地下に埋設されているラインが掘り返されていた。これらの行為がすぐ近くに植わっている街路樹の根を傷つけ、根部からの腐朽進行の原因となることは十分に考えられる。

最近、我が国においても、都市景観の改善、街路樹によるヒートアイランド現象の解消といった観点から、電線等の地下埋設化が進んでいるが、樹木の根に対する配慮を忘れてはならない。

## 5. おわりに

日本の街路樹管理では、電線により樹高が抑えられ、極端な強剪定が毎年繰り返されているところが多い。地域によっては、一年間の半分以上の期間、枝が切り取られて棒状態の街路樹もある。これでは、何のための街路樹かわからない。しかしながら、日本型管理の利点として、毎年の強剪定により大木化を防いで、未然に倒木の危険性を小さくしていることも事実である。

「街路樹に何を求めるか」がポイントとなるが、倒木等の危険回避技術の確立が前提条件になることは間違いなく、その次の段階で景観等について

論じられるべきである。現在、国内では日本造園協会が独自に「街路樹剪定士」を認定する制度を創設したり、造園業者を中心に「樹木医」の資格取得が進むなど、施工業者において街路樹管理技術は向上しつつある。

最後に、これらの街路樹の植栽生育空間が確保され、剪定等の管理技術が向上したとしても、日本の道路にどれだけの美しい街路樹が成立するだろうか。美しい街路樹には、落ち葉処理を筆頭とした我々住民のみどりへの管理意識、参加意識が、最も必要なのではないだろうか。

### 参考文献

1. Alex L. Shigo著／日本樹木医会訳・編.  
1996. 現代の樹木医学. 日本樹木医会. 40-49
2. 社団法人日本造園建設業協会. 2001. 街路樹剪定士必携. 社団法人日本造園建設業協会.  
44
3. Claus Mattheck・Helge Breloer著／藤井英二郎・宮越リカ訳. 1998. 樹木からのメッセージ. 誠文堂新光社
4. 亀野辰三. 1997. 街路樹・みんなで作るまちの顔. 公職研. 137-138
5. 奈良県土木部. 1998. 街路樹の整枝剪定マニュアル. 奈良県土木部. 2